



第二十一回 海津城

～武田、上杉両陣営の最前線～

海津城は、信州善光寺平の南、松代の地に在る城です。この城は、江戸時代には真田藩の中心となりますが、それより前の戦国時代においては、大方、敵対する勢力同士の最前線となっており、抗争の絶えない場所でした。

今回は、この城と関わりの深い川中島の戦いを取り上げて、その歴史等をご紹介します。

北信濃への武田勢の進出と海津城の大改修

海津城の在る場所には、もともと在地主豪の館が在ったといわれます。この在地主豪の館を接管、大改修したのが、甲斐の武田晴信（後の信玄）で、その時期は、北信濃の村上氏を越後の長尾景虎（後の上杉政虎、謙信）の下に追いやった天文22年（1553年）以降と推測されます。この大改修について、当時の直接的な記録は残っていませんが、当時の情勢から察して、永禄2、3年（1559、1560年）頃までに完成したとみられます。

この城の主目的は、善光寺平北側の長尾（上杉）方の抑えです。そのための天然の障壁として、北西を蛇行して流れる千曲川と、三方を囲んだ山々を利用していました。そして、周囲の山々に配された支城とともに、善光寺平の南に一大防衛ネットワークを築いていたのです。

北信濃勢への長尾（上杉）の加勢

さて、武田勢の北信濃への進出により、北信濃の中心勢力だった村上氏が越後に亡命したことは既に述べました。これにより、北信濃に残る有力な反武田勢力は、善光寺平の北を領する高梨氏ぐらいになってしまいます。この事態に及んで、越後の長尾景虎は、高梨氏の支援と、村上氏の旧領回復を標榜して、善光寺平に出兵することになります。

ちなみに、巷では、“長尾景虎（上杉謙信）は義の人で、正義のために闘った”と、よくいいます。そのため、川中島の戦いも北信濃の豪族に頼まれて正義のために行ったといえます。はたしてそれだけでしょうか。景虎の本拠地の春日山城は、善光寺平の北辺からみて40km程しか離れておらず、高梨氏が抜かれれば、そのまま武田勢に本拠地を脅かされることとなります。そうすると、川中島への出兵は、自国の防衛のために外なりません。また、景虎は、自軍の兵に、敵地での略奪を認めています。当時の倣いではありますが、合戦には、農閑期の口減らしと出稼ぎの側面があることを忘れてはいけません。

俗説にみる川中島の戦い

こうして、善光寺平をめぐる長尾景虎と武田晴信の直接対決が始まります。通説では、善光寺平の川中島近辺で、5回、12年にわたって合戦が行われたとされます。そのうち、もっとも激戦だったとされるのが第4次川中島合戦で、一般には、これが川中島の戦いと呼ばれます。

この合戦の詳細はいろいろな所で紹介されていますが、ざっとおさらいをしておきましょう。

（川中島の戦いの経緯）

①永禄4年（1561年）、上杉政虎（同年に長尾景虎から改名）が1万8千の兵を率いて善光寺平に進出。善光寺に5千の兵を置き、自身は1万3千の兵を率いてさらに南下。海津城の近くを通り過ぎて、城の南西に位置する妻女山に布陣。②武田信玄（晴信の出家後の法名）が2万の兵を率いて、妻女山北西の茶白山に布陣。暫しのにらみ合いのあと、妻女山の北を通って海津城に入城。③信玄は兵を本隊と別働隊の二手に分け、夜中に別働隊の1万2千を妻女山

へ送り出して、政虎の追い落としを計画。自身は本隊8千とともに川中島で鶴翼（敵を包囲するための陣形）に開いて待ち伏せ。④政虎は、武田別働隊の動きを察知して妻女山を降り、朝霧が晴れてから川中島の武田本隊に車懸の陣（順次、部隊を投入するために陣を旋回させるもの）で攻撃を開始。⑤武田本隊が大苦戦。信玄の弟の信繁他、名だたる武将が討死。⑥政虎と信玄の一騎打ち。⑤武田別働隊が川中島に駆けつけて上杉軍の側面を攻撃。形勢逆転。⑥政虎が兵をまとめて撤退。⑦結果として、戦死者は上杉軍が3千余、武田軍が4千余。



両軍の進路

川中島の戦いは本当にあったのか

こんな表題を書くとはびっくりされそうですが、真意としては、川中島で戦いはあったが、上記のような合戦の経緯があったかどうかは、あやしい……ということです。

実は、史実として確認できるものは、1) 上杉軍と武田軍の軍事衝突があった、2) 信玄の弟の信繁が戦死した。3) 武田の一部隊が上杉軍の側面を攻撃した、ということしかありません。

俗説の戦いの経緯には突っ込み所が多々あり、上杉軍が海津城を中心とした一大防衛ネットワークの間ないし近くを通るわけがないとか、妻女山の上に1万3千もの兵が陣取った形跡がないとか、1万2千もの兵が夜中に山中を行軍するのは不可能だとか、車懸の陣と称して軍隊がぐるぐる回るなんてふざけているのかとか、双方とも数千名の戦死者を出していたら両軍とも再起不能だとか……、挙げれば切りがありません。

よくいわれるのが、両雄の一騎打ちはなかったということです。それで、より細かいところを突っ込むと、江戸期の屏風絵や現代のドラマ等で、一騎打ちの際の政虎が僧体で描かれていますが、この時点で政虎は出家していませんので、これはまずあり得ません。

ここまで否定的に書くと夢もロマンもないので、一応フォローを入れると、政虎が合戦後に書いた書状の中に「自らが太刀を振った」とあるので、両軍激闘の中、その太刀先に信玄が居たかもしれない……とはいえると思います。

海津城のその後

善光寺平は、第5次の合戦を経て、ほぼ武田家の支配するところとなります。しかし、戦国の世はこの地になかなか安定を与えてくれません。武田家は織田信長の侵攻によって滅亡。善光寺平は信長の勢力に組み込まれますが、その信長も本能寺の変で横死。空白地帯となったこの地には、上杉の勢力が入ります。その後、上杉家が会津に転封されてまた領主が変わりますが、最終的に、江戸幕藩体制が整ったところで、真田信之が海津城に入り、この城を藩庁として真田十万石は幕末まで続きました。

海津城の現在

平成7年～14年までの整備事業により、本丸の太鼓門と北不明門、二ノ丸の土塁や堀が復元されています。復元の対象時期が江戸中期から末期なので、川中島の戦いの頃の姿とはいきませんが、本丸から妻女山を眺めれば、戦国期の気分になれることでしょう。

近くには、真田邸、文武学校、真田宝物館といった見どころも多いので、歴史に興味のある方には、お勧めの城跡です。



海津城太鼓門